

(2) フォークカトリシズムの場合

クレウザは47歳の女性でレシーフェ市内にある自然食品会社の販売員をしている。夜間高校に通っており、あと1年で卒業予定である。8年間の義務教育は7年生まで終えたが、それからは経済的な理由で行けなくなった。そして、姉が住んでいるサンパウロに移住して工場働くことになった。彼女はもともとカトリックを信仰していたが、それはフォークカトリシズム的な信仰だった。天理教の事例でも論じたように (Vol.17 No.1)、祝祭的なフォークカトリシズムの要諦は、聖人にプロメッサ (願掛け) することでグラッサ (現世利益) を得ることにある。天理教への入信事例では多神教的な聖人信仰から一神教を要とする信仰への変化がみられた。そのプロセスで確認されたように、今回の事例でも物的な現世利益の願いは後退する。そして、「心なおし」という心的変化の獲得が重視されるようになっていく。

さて、クレウザはサンパウロに移住した初めの2年間、姉が通っていた長老派のプロテスタント教会に通った。しかし、服装や行動規範が厳しかったため窮屈に感じて行かなくなった。その後、25歳で結婚して1男2女を授かったが、放埒な夫に苦しめられて離婚することになった。

私は夫とよく喧嘩していました。夫は午前様が多くて週末はとくに酷かったです。夫には仕事をしてほしいと言って腹を立てることが多かったです。今から思えば私は夫に圧力をかけていたんです。今は、その当時と考え方が変わりました。夫にはとても申し訳のないことをしたと神様にお詫びしています。夫との不和をつくり出していたのは私だったのです。

離婚してからPLに入会したんです。離婚後、私はどうやって生活していけばいいのか分からなくなりました。収入の当てがなくなってしまったんです。そこで知人の女性弁護士に相談しました。彼女の事務所に行ったとき、オミタマ (PLの礼拝対象) が目に止まりました。彼女はPLの補教師でした。彼女の勧めで入信したのですが、かつて離婚した夫の母親にPLを勧められたことがありました。神業 (かんわざ) というのがありますが、今思うとその時から私はPLにつながるようになっていたんだと思います。

インタビューでは信者の多くが「すべては神業」と言うのをよく耳にする。彼らの信仰の要を象徴する用語であることがわかる。PLの教えによれば、「神業」とは大自然の法則であり神の摂理である。この世の中に現れる一切のことで、それを喜びとして理解するのが人間の道に叶うあり方だとされる。したがって、神業を心配したり困ったりするのは神への反抗と同じである (パーフェクトリパティー教団文教部 1997: 78)。目の前に生起するすべての現象をありのままに受けとめて「自己表現」すること。これがPLの信仰生活の基本となる。

教団幹部の川島通資によれば、自己表現する際、自己の感覚に囚われてはならない。囚われの感覚は、神としての全体に自己を対立させることになり、そのためにかえって神の摂理である神業に順応できなくなるからである。求められる自己表現とは、神と自己とが一体になり、神と一体になった人としての神業をあますことなく生きることだという。それはまた、「客観の境地」、「天

人合一の境地」を目指すことだという (川島 1995: 80)。

神業という解釈の枠組みは、クレウザにとって苦しみの体験を再解釈するうえで重要なツールになった。前夫の行動を身勝手と思ったのは自己に囚われていたからで、彼女は神業に対立していたのだと反省した。それゆえ「悪かったのは自分だった」と理解するようになった。その時、彼女は苦難から解放された。

このような倫理的視点の転換は、PLの個人指導で導かれたものである。彼女は「みしらせ」と呼ばれる自身の苦しみを解決するために教会で「みおしえ」を願い出た。PLでは人々が日常で体験する苦難は「心癖」というその人の自己表現の歪みだと理解する。神は人間が自分自身の心癖を自覚して自己表現を正すために、病気や災難などの「みしらせ」を教示する。彼女には、やがて日本の本部から送られてきた彼女宛の「みおしえ」をもとに教会で個人指導が行われたのだった。

私の考え方が変わって、神業も変わってきました。今になると分かるんですが、身の回りの人や物事に責任があるわけではなくて、私自身に責任があるということなんです。その人の考え方が重要なんです。その人が否定的な考え方をしていたら、それが人生を悪くするんです。私の生活に変化が見られるようになりました。レシーフェからサンパウロの聖地にも行けるようになりました。

私はとても反抗的でしたし他人を責める性格でしたがPLに入会してから変わりました。神様をお願いすることで、そういう心をなくすことができるようになりました。今は色々なことを自然に受けとめることができるようになりました。他人が悪いと思ってきましたがそうではないんです。私は今もなお、もっと慎ましく、優しく、他人を理解できる誠実な人間になれるよう努力しています。誠実で他人を理解できる心があれば離婚することもなかったように思います。

天理教に入信したアウシーナが「責任は私にあるんです」と語ったように (Vol.17 No.2)、クレウザも同様に語る。アウシーナは、「人間は自分自身の心の主人ですから自分のいんねんを変えることができるんです」と語り、そこに筆者は「個の自覚」を見出した。その「個」とは過去と未来の「他者」によって成り立つ「個」で、「私ならぬ私によって私である」という時間的連続性を携えた「個」であった。そして、そのことを自覚するようになったからこそ、彼女は救われていると思えるようになった。同時に、いんねんをより良き方向に変えることの責任をも感じるようになった。ではクレウザの場合はどうだろう。

おそらく回答の鍵は先の川島の解説の中に見出せるはずである。PLにおける理想の「個」とは「天人合一の境地」としての「個」である。とするなら、そのような境地に立つ「個」とは時空間を超える存在と見做される。信者らは客観の境地に立つことで神と自己の一体化を感得する。そこに彼らは救済を見出すのである。PLでは因果応報を説かない。その理由は、このような「個」に規定される人間観と救済観があるからだと思われる。

【参考文献】

パーフェクトリパティー教団文教部編『PL信仰生活心得解説』芸術生活社、1997年
川島通資『PL 処世訓入門 ー人生を芸術するための21か条』芸術生活社、1995年